

常磐松文庫本『九条家本源氏物語聞書』解題拾遺（一）

野村精一
渡辺道子
徳岡涼

一 はじめに

本書については、先に本誌第十五号（平成八年三月刊）以降二十号に至る六回にわたり、翻刻および解題を連載した。本稿は、それらについての補遺として編んだものである。よって、野村、渡辺、徳岡の三名のほかに、礎稿作成、校正などに協力を惜しまれなかつた方々の氏名をまず録して謝意にかえたい。（順不同）

川島 絹江氏

葛原 由可氏

松原 哲子氏

ほかに、翻刻全般にわたって、上野英子氏の献身的な協力をえた。特に記して謝する。

なお、此の稿筆者の一人徳岡は、すでに単独で「実践女子大学常磐松文庫『九条家本源氏物語聞書』解題」（本誌二十号 調査報告四十七―六）なる報告を発表しており、若干の重複は免れないが、その後の調査をも踏まえて、改めて稿を

起こしたものである。彼此相補うところもあり、すべからず参照されたい。

二 本書の「著者」について

近時、源氏物語の古注類に対する関心とみに旺となり、これまでマイナーなものとされてきた注釈書にまで、翻刻や研究の対象とされるようになった。藤田徳太郎、山岸徳平、大津有一、稲賀敬二氏ら諸先覚といえども、夢想だにしなかったことかと想像される。が、それだけに、量的にはとにかく、それらの質的水準については、そのまま評価に値する現象と言ふべきか否か、直ちに速断しがたいところではあるまいか。これは、ひとつには、新資料の紹介にある種の評価が与えられる近來の傾向に拠るところが大きいと考えられるが、ために、その資料の意味についての、説得的な紹介すべき十分な論拠が明示されぬまま、機械的な翻刻文のみ提示されている、というケースが多いのではなからうか。その点では、右の諸先学たちのそれが、たとえば藤田、大津氏らのようにリスト作製を目的とした場合を除けば、自らの研究の必要から、特に論旨の展開の一段階として、しかもほとんど学界未知の文献であったがゆえに、それらの紹介がやむにやまれぬものであったのとは、いささか質を異にしていよう。そのような趨勢じたい、こんにちの国文学の状況を、こよなく表現しているとも思われるが、ここはそれについてふれる場ではない。ただ問題の所在について指摘するにとどめる。

さて、そうした観点にたてば、この「九条家本源氏物語聞書」が、どのように学界に登場したかを顧みることは、必ずしも意味のないこともあるまい。本書の最初の紹介者は、伊井春樹氏であったとおぼしい。すなわち、

○此物語今ノ世ニ用ル処宗祇よりの伝也、然バ祇の師は志多良ト云人なり、是ハ武家ノ御所ノ奉公衆と承及、如何、祇この物語ノ中興と見えたり、(実践女子大学図書館蔵常磐松文庫『源氏物語聞書』料簡)

としたのが、それであろう(今便宜同氏『源氏物語注釈史の研究』二九三頁による)。もちろん氏の視座はこれにとどま

るものでなかった。最近においても、氏は、最新の労作『源氏物語註釈史・享受史事典』の該当項において、右を引用して紹巴との関わりを説き、あるいは、三光院実枝を通しての三条西学の系譜に触れ、ことにそれらを概括して、

また、宗牧、宗碩、心前など連歌師の諸説も吸収されるなど、室町末期から江戸初期にかけての、通勝がまとめた『岷江入楚』とはまた異なる、当時の源氏物語享受ないし講釈の実態を知る資料として貴重である。

と結論付けられる。ただし今日的な意味において的確な指摘であるといえよう。(なお「本文」項中に誤りがあるのを注記しておきたい。)ここでは、氏の所説によりつつ、その触れられることのなかった側面についても、補っておきたい。

右の著によれば、「著者」の項に「中院通勝」とある。近代的な意味での著作権の存在しない此の時代の書物について、「著者」の項をたてることじたい、適宜かいなかの問題もあろうが、「事典」の性質上やむをえないのかもしれない。ただそれにしろ、たとえば、「河海抄」の「四辻善成」や「紹巴抄」の「里村紹巴」のような著者名を与えることが、必ずしも適宜だとしがたいところがあるかとおもわれる。すなわち、本書のばあい、これが「原著者」の手になるオリジナル(原本)ではなく、すくなくとも二次的な再編本であるということなのである。該書の現状からすると、全編一筆のそれが、通勝じしんのものでありえない、としてさしつかえないであろう。しからは、他者による献上本のたぐいの清書本か、ともしにくい。そのもつとも大きな徴証が、各巻末尾の「追」として立てられた、いわば補充部分である。これは、一見『岷江入楚』のいわゆる「別勘」に似ているが、しかしこれは、『岷江入楚』の桐壺における「源氏私註」のように(ただしこれは諸本によってその位置が異なる)同じ著者による別書からの引用や、竹川、寄生などの「弄花」のように先行注を著者じしんが各冊の「奥」に付加したものを指すもののごとくである。ここでは典型的な例として、「花散里」の場合をあげておく。底本は潮廼舎文庫本『岷江入楚』である。

きもなき也源の性也

……(八行略)……

ありつるかきねもさやうにて

和中川のやとりの事也

よへの中河のやとの女もとたえをうらみてあらぬよすかの
のいてきたる人といふ也

已上草子の地と見えたり

私抄別勘

奥ニアリ

「(一二オ)

一よくなることをあつまにしらへて

これもよくなるあつまことをしらへてとみるへき状

……(一二行略)……

一いとさらなる世なれと

さらなるとはもとより何事も昔のことくにはあらてさらなる

「(一二ウ)

世なれとも其中にもいと物あはれなると見給なるへし

須磨巻にもさらなる事なれとありし世の御ありき

にことなるとありさらなるとは思ひ出もなくなんと

いふ詞と見えたりおもひまうけつる事なれとなど、

いふかことし

已上秘抄ノ奥ニ書入 此書様如本

「(一三才)」

これは「秘抄」のばあいであるが、これらに對して、本書のばあいは、形式的にもかなり異なっている。すなわち、右の「別勘」が例外的に数卷に付加されている趣きであるのに對して、こちらは、「絵合」「松風」「常夏」「初音」「早蕨」以外には、すべて「追」がある。これらが「追」を欠くゆえんの一つは、第三冊を中心に見える巻序の錯簡がもたらしたものと
かと思われる。なぜなら、通常「追」は改丁して写されているからである。綴じるにあたって、脱落した可能性も否めない。また、その実体においても、

くはやとて くわやと読へし

さたにおもひよらす 頭中将の心也

(篝火「追」全文)

や、

さし過人いとありかたく—— 尼たちの事也薰の

文を見てうつくしとて有かたかる也

すけせしめてし てしは詞なり弟子にはあらず

(夢浮橋 同前)

のように、ほとんど本文部分、すなわち、講釈の口吻を伝えているところに近い注文もあるが、これらは、後半に至って激減し、その多くは、「尻付」などの形式で、他書からの引用であることを示している。而して、それらによれば、もっとも多く引用されているのが、饅頭屋宗二の「林逸抄」であることに、大きな特色を見いだす事ができよう。たとえば、次のように引かれる。

かの君にたてまつらんと—— 母の詞也 林逸二 薰へたて

まつらんとしたる也 清 林 うき舟へと思ひしを大夫 二 出すと也 林

うきふね^ニ奉んとおもひし也直に薫^ニ奉るへき^ニあらさる也

(蜻蛉 第五冊七六オ)

の「清」は、「林逸抄」にも見られるもので、すでに清原宣賢説とみる向きもあるようだが、未だ確証をえない。また、「休」も「休閒抄」とみられる。この他「二葉」もしばしば引かれており、要は、同時代地下連歌師圈を巻き込んだの補注の集成をめざしているかのようである。それをしも、通勝の意図として断ずることができるかどうか、なおためらわれるのではあるまいか。すなわち、当の「林逸抄」を見るに、

かの君に奉らんと—— かほるへ奉らんとしたる也^清浮舟

へともひしを大夫にいたす也^休帯を浮舟に奉らん

と思ひし直^マにかほるに奉るへきにはあらさる也

(内閣文庫本「蜻蛉五十二」三五ウ〜三六オ)

とあり、更に「休閒抄」の該当項を参照するに、「浮へと思ひしを大夫にいたす也」とあつて、これらを系列的によめば、そこには自ずからかなり精度の高い書承関係を読みとることが可能であろう。これに対して、『岷江入楚』では、

かの君にたてまつらんと

^秘浮舟にまいらせて大将殿へ奉らんと心さしたる

帯也

^弄帯を浮舟にたてまつらんと思ひし也直に薫へ奉る

へきにはあらさる也

(前掲本 第五十三冊三七ウ)

とあり、是に關わるるところでは「浮舟にまいらせて大将殿へたてまつらんと心ざしたる帯也」（内閣文庫本 細流抄）、「帯をうき舟に奉らんと思ひし也直に薫には奉るへきにあらざる也」（『弄花抄』）とあるように、その依つて來るところの系列が、むしろ異なつていようか、という印象である。されば、ここでは、あえて『岷江入楚』の著者を、即自的にこの「九条家本聞書」現存本の編者に比定することには慎重でありたい、と考える。

なお、本書の筆写については、その料紙・装幀・筆法・書体などからみるに、地下の連歌師ないし佛家に属するかと思像されるが、それが、九条家に入るに至つた事情など、まったく不詳である。その時点も、明示されている「慶長」をかなり下るかと思はれる。いづれにもせよ、いまのところ天下の孤本であつて、原本はもちろん、他の転写本、関連する文献などが発見・紹介されることが、強く望まれるものである。

* * *

付表 調査報告四十七一（第十五号所収）正誤

頁行 誤

正

156	3	又源氏と云 <u>夏有事</u> にも非ず	又源氏と云 <u>夏有事</u> にも非ず
157	6	少 _シ つ、の替りあれとも	少 _シ つ、の替りあれ共
158	7	よく知さる也其時は清少納言	よく知さる也其時代は清少納言
161	17	あらはし給と云事いか、	あらはし <u>的</u> と云事いか、
162	21	先帝誰ともなし	先帝誰共なし
162	2	りかんしたる事也	りうんしたる事也

— 「給」カ

176 176 175 175 174 172 172 171 171 168 167 167 166 165 165 165 165 162
 19 3 8 5 15 6 4 16 6 6 20 1 20 18 12 10 5 21
 利具トリグシ されハかのさかなものも——
 引屋はとめける也
 也是御雑談
 誰ともしらす
 大工の事にニも有へし
 ひひらひらきあたり
 前ヲ合て
イ一つきせんの心也心浅き所也
 しあはする儀也
 此以叶へり
 ゆへつきて
 はしりかき
 好色なれとも
 此説を引給へり
 一かたには云給す也
 四帖五帖ニ通する也
 義理あれとも

義理あれ共
 四帖五帖ニ通する也
 一かたには云けす也
 此語を引給へり
 好色なれ共
 はしりかき
 ゆへつけて
 此心叶へり
 志あはする儀也
イ一きせんの心也心浅き故也
 前ヲ合て
 ひひらきあたり
 大工の事ニも有へし
 誰共しらす
 也足御雑談
 引やはとめける也
 されハかのさかかなものも——
 取具トリグシ

195 194 194 192 192 190 188 188 187 187 185 184 183 181 179 179 178 177
 19 22 2 20 11 23 20 18 21 3 2 8 23 15 15 2 7 5
 あれとも なけし—— よれてこそ されとも さもおはせ給す たけたち 虚蟬とも 心にくき也 恋きと也 折もしならめ ものは——いと 何ともし 事なれとも 真人を改めて朝臣となす也 さうくかめれ れいはいみ給事 かなふみ 其夫一貧家ノ女ハ孝アリ於

其夫一貧家ノ女ハ孝アリ於
 おんふみ
 れいはいみ給ふ方
 さうくしかめれ
 真人を改めて朝臣となす也
 事なれ共
 何共し
 ものは——いと
 折も——ならめ
 恋きとなり
 心にくき也
 虚蟬共
 たけたち
 さもをはせ給す
 され共
 よりてこそ
 なけし——
 あれ共

199 初夜也
 200 さうとはしらせずして
 208 見ばをとりやせむ
 208 こみやす所
 208 わかひて
 208 少納言の云る也
 209 屏風
 211 説あれとも
 211 左衛門のめ^マのとは
 212 然とも
 217 くさわひと讀へり
 217 何たるもの共
 218 源の御袖もぬるゝや
 220 女とも
 225 東宮一院 一院は
 229 なれ共
 231 あやしかりしか
 236 かしこまりてまかで給ぬ

初夜なり
 さうとはしらせずして也
 見ば^〇をとりやせむ
 こみやす^ン所
 わかひて
 少納言か云る也
 屏一風
 説あれ共
 左衛門のめ^マのとは
 然共
 くさわひと讀へし
 何たるもの共
 源の御袖もぬるゝ也
 女共
 東宮一院 一院は
 なれハ
 あやしかりしか^〇
 かしこまりてまかで給ぬ

